

## デジタル化以降の現代写真における写真メディアムの可視化

村上由鶴(日本大学)

---

本研究は、メディアムの観点から現代写真表現を考察し、デジタル化以降の写真研究の不足を補うことを目的とする。デジタル化以降の写真に関する研究では、ウィリアム・J・ミッチェル(William. J. Mitchell, 1944-2010)の『リコンフィギュアード・アイ』(1994)があるが、技術論的観点からデジタル写真を従来の写真とは異なるものと結論づけている。しかし、写真芸術においてはデジタルでもアナログでも写真術を制作の中心に用いた作品は同様に写真として扱われているのが実状であり、現在の広範な写真表現には即していない。また、ロザリンド・E・クラウス(Rosalind E. Krauss, 1941-)は一連のポスト・メディアム論に含まれる「メディアムの再発明」(1999)において「時代遅れとなったテクノロジー」として写真にも言及しているが、デジタル化以降の写真表現をメディアムの観点から考察するには至っていない。このようにパラダイム転換後の写真を美学的に分析した研究は未だ不十分である。

写真は誕生以来、より簡易的に高精細な像を得られるように進歩してきた。2010年代に入ると、写真技術の発展によって高画素のデジタルカメラや画像処理技術が搭載されたスマートフォンや携帯電話等が登場し、写真の簡易化は最高潮に達した。写真技術は職人的な技能から実際にすべての人が用いることのできるテクノロジーとなったのである。一方で、同時期の芸術としての写真表現においては、デジタルかアナログかの技術を問わず写真に過剰な介入や加工を施し複雑なプロセスを踏む作品や、撮影行為を制作の中心に置かない作品が目立っている。これまで、クラウスが述べたように写真は「指標的性質」を持つ記号として扱われ、現在に至るまでその性質を追求する作品が作られてきた。その過程で写真への介入は排除されてきたが、現代の写真表現では排除されてきた介入や加工が積極的に行われるようになっている。

本研究では、デジタル写真登場以後に顕著になっている高度な技術やツールを用いて写真術や制作プロセスを顕在化させる表現に着目し、デジタル化以降の写真研究にメディアムの観点から補足を加えたい。そこで、写真への介入や加工を制作の中心に据えた写真家である横田大輔(1983-)や、アスガー・カールセン(Asger Carlsen 1973-)、ルーカス・ブラロック(Lucas Blalock 1978-)の、写真であることを意識的に表明する作品を例に、デジタル化以降の写真表現の変化と特異な性質について考察し新たな美的価値を提案する。また、これまで写真表現は写真史の系譜に位置する「芸術としての写真」と美術史の作品に用いられる「芸術のなかの写真」に区別されて扱われてきた。本研究は、写真のメディアムに着目することによって、これらの制度的な区別、さらにデジタル・アナログという技術的区分を超えて現代の写真に対応する写真論を試みるものである。